宮崎県

シニア災害ボランティアセミナー開催報告

災害に強い地域づくり

～過去の災害に学び、次世代に伝える～

平成26年2月6日（木）、宮崎市のKITENビル大会議室において、シニア世代のボランティア参加について考える機会を設ける目的で、宮崎県、当協会の主催による「シニア災害ボランティアセミナー　災害に強い地域づくり～過去の災害に学び、次世代に伝える～」が開催されました。

まず、冒頭に、主催者を代表して、宮崎県の橋本憲次郎危機管理統括監が挨拶し、続いて、四国大学の日開野博教授による講演が行われました。

なお、講演の概要はつぎのとおりです。

講演　10：40～11：40

災害とボランティア活動
～阪神・淡路大震災と東日本大震災の災害ボランティア支援から～

四国大学短期大学部人間健康科
教授　日開野 博 氏

災害ボランティア活動のあり方について、10テーマを挙げ、順序立てて、分かりやすく講演いただきました。

1．生涯学習としての防災学習と福祉のまちづくりへ

災害に対して、日頃より地域コミュニティをしっかりとつくり、助け合いや、共助の精神で取り組むことの大切さを提言、徳島県で行われている、幼小中高大からお年寄りまでを対象とした防災教育、防災訓練の事例が紹介されました。

2．震災支援のボランティア活動とマナー

95年1月17日の阪神・淡路大震災発生時、日開野教授自身が徳島県社会福祉協議会に勤めていた時に経験された、淡路島の被災地での救援活動について話されました。

救援物資の中に古くて傷んでいて着られない服や、腐った食品などが混ざっていたことに触れられ、送る側の良識あるマナーを訴えられました。また、東日本大震災では、11年9月に学生30名と共に行った、岩手県の被災地における仮設住宅の交流活動や生活支援活動、かつ、農業、漁業組合での作業お手伝いなどによるボランティア活動が話されました。

3．若者の力を活用した防災学習と防災活動

防災教育の中で、素早く活動できる若者に頼ることの効果が語られました。例として、災害時における高齢者、車椅子の方の避難所への移動に小学生がおんぶや手を引いたりして手助けしていること、また、中学生、高校生の被災地での支援活動が大きな力になるなど、若者を取り込んだコミュニティづくりの必要性が話されました。

老若男女を問わず、いざという時に近隣の人同士がどのように助け合うことができるか、どのようにコミュニティの中で支え合って命を守ることができるかが問われていると述べられました。

4．高齢社会型の災害支援

体育館での避難生活における、被災者それぞれの過ごし方の問題点が語られました。

日開野　博
四国大学短期大学部人間健康科教授

徳島県社会福祉協議会を経て、現在、四国大学学生ボランティア活動推進室スーパーバイザーの要職も務める。平成7年阪神・淡路大震災四国四県社協支援により、第一陣の淡路島ボランティアベースキャンプを立ち上げ、現在も被災地の高齢者と学生との交流を継続中。東日本大震災では2011年から毎年学生たちとともに大槌町、釜石市、陸前高田市を中心に、仮設住宅での交流活動や被災者復興支援活動を3カ年にわたり行っている。

便利な場所の取り合い、障害者を持つ家族が気まずく思い、体育館の隅の方に場所をとること、体育館から離れた仮設トイレにより困惑する高齢者の問題など、事例を交え話され、考えさせられる内容となっていました。

5．災害ボランティアセンター活動とボランティア

阪神・淡路大震災の際、マッチングシステム（ボランティア参加者を希望する活動に割り当てる仕組み）を創り上げた淡路島のボランティアベースキャンプが紹介されました。

ボランティア活動は、自らできることを見つけて実践することが本来の姿であること。また、ボランティアとは、日常の生活課題に気づき、課題解決に向かって進むことであり、例えば、ゴミがちらかっていたらゴミ箱に入れる行為がボランティアだと語られました。また、コミュニティの中で世代と世代がつながっていくことが大切であり、とりわけシニアボランティア世代に求められていると提言されました。

6．災害時でのボランティアニーズとは

阪神・淡路大震災時の淡路島での救援物資分配について話されました。災害支援に来たボランティア約100人が、物資を仕分けした集計表を避難所に貼り出し、注文を受けて、必要な人に必要な物を割り当てるという、公正公平な取り組みが紹介されました。

7．東日本大震災支援とボランティア

災害ボランティアセンターの運営について、ボランティアニーズとボランティア参加者をきちっと把握できる情報とネットワークが必要で、各ボランティア参加者の登録とボランティア保険の加入は必須。また、信頼・信用のおけるボランティアスタイルとして、ユニホームや腕章を身につける必要性が述べられました。

8．災害時のボランティア活動の心得

ボランティア活動の心得と視点について話され、一つ目は一人一人のニーズに対応した生活支援型、二つ目は必要な支援を、必要な時に、必要な場所へ、必要な物・人へ、三つ目はボランティア参加者は自給自足、四つ目は自らの活動を見つける、との説明がなされ、被災地に入ってボランティア活動をする人は、宿舎、食糧、健康面を含め、全て自分で確保しなければならないことが話されました。

阪神・淡路大震災でのエピソードとして、活動中にボランティア参加者が頑張り過ぎて倒れ病院まで数回運んだこと、ボランティアシンドローム現象（一生懸命やり過ぎて、帰ってきたら何もやりたくない状態のこと）が注目されたことが紹介されました。

9．災害時要援護者支援への視点

宮城県ではいまだに支援の手が届かず、倒壊しそうな自宅で過ごしている障害者が大勢いることが話されました。避難所に車椅子で行くことを躊躇し在宅生活している障害者、避難所への行き方が分からない視覚障害者や聴覚障害者、これらの避難できない方々が最も支援を必要としていると話されました。

10．災害支援から私たちに投げかけられているもの

東日本大震災支援活動から、私たちに絆やネットワーク、つながりなどが投げかけられていること、また、町内会やご近所に「見守る力」「触れあう力」「発見する力」「支え合う力」「おせっかいする力」を持つことで安心・安全なまちづくり、災害に強い地域づくりに近づくことができると話されました。

最後に、岡本一平作詞の「とんとんとんからりんと隣組」が紹介されました。

とんとんとんからりと隣組　格子を開ければ顔なじみ　回して頂戴回覧板　知らせられたり知らせたり
とんとんとんからりと隣組　あれこれ面倒味噌醤油　ご飯の炊き方垣根越し　教えられたり教えたり
とんとん　とんからりと隣組　地震かみなり火事どろぼう　お互いに役立つ用心棒　助けられたり助けたり

防災に強いコミュニティ、いざというときに見守ってくれるのは隣人であると話され、講演が締めくくられました。